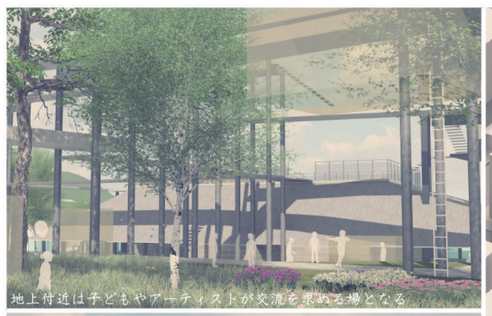
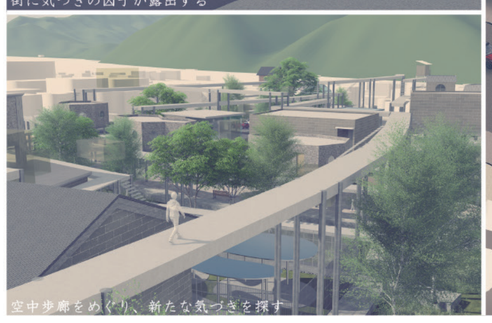
気づきの立方体モデル

― 不登校児童・生徒の現状から考える、これからの学びの場 ―

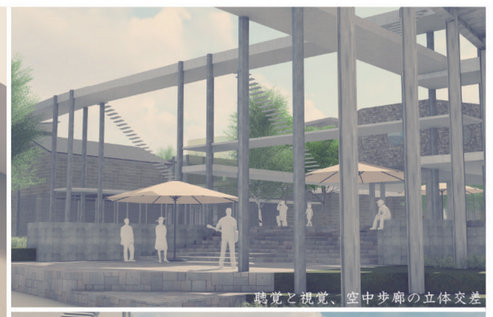

地上付近は子どもやアーティストが交流を求める場となる

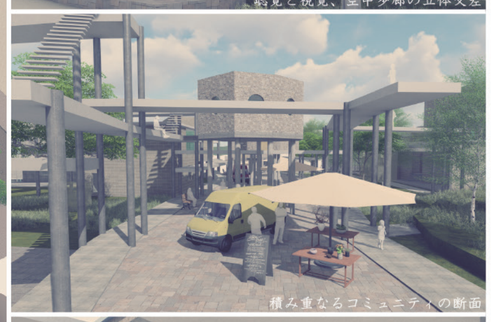
石山通から見る「五感」が並ぶファサード

街に気づきの因子が露出する

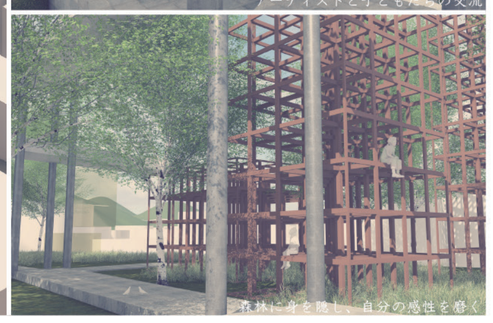

空中歩廊をめぐり、新たな気づきを探す

近年、小中学校における不登校児童・生徒の数が急激に増加していることが問題となっている。国の調査によると、不登校の要因でもっとも多くの割合を占めるのは「無気力・不安」であり、非常に単純な言葉でありつつも、その背景には今の社会だからこその問題があると考える。本設計では現代における不登校の子どもたちの背景を探り、子どもたちと社会が豊かに成長していくためのこれからの学びの場を提案する。


聴覚と視覚、空中歩廊の立体交差


積み重なるコミュニティの断面

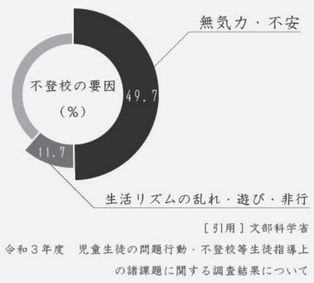
アーティストと子どもたちの交流


森林に身を隠し、自分の感性を磨く

01 不登校の背景を探る

不登校児童・生徒の増加

不登校の実態として、文部科学省の全国の不登校児童・生徒を対象とした調査によると、令和 3 年の不登校児童・生徒数は約24万人であり、直近5年間で急激に増加している。また、不登校になった要因とその割合もまとめられており、その中で私が注目した要因が「無気力・不安」という項目である（右図）。不登校児童・生徒数の約半数を占めるこの原因にはどんな背景があるのか。本設計では私の不登校の経験をきっかけに、様々な事例などからその背景を探り不登校を解消できるような建築的手法を模索したのが出発点である。



［引用］文部科学省
令和３年度　児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について

不登校の背景

子供も SNS を利用する時代の中で、子どもたちは自分と全世界がつながった社会で情報を過剰に摂取し、膨大な情報の中にのまれていくことで自分の周囲が霞んでしまうのではないだろうか。また、核家族化によって子どものコミュニティが狭まることから、社会に対する解像度が低いまま大人に成長してしまうのではないだろうか。このような二つの社会背景から、**視野が狭い中で情報にのまれる状態、社会の解像度の低い状態、周りの目を気にしてしまう状態**が重なり、結果として自分の限界を無意識に決めつけ、自己肯定感の低下につながるのではないだろうか。

他者の基準で自分を比較する

歪み狭まった視界の中でもがく

比較対象の膨大さ

02 これからの学びの場を考える

「もう一つの学校」

多様な学校が増え続けている今、「学校」として国の認可を受けていないオルタナティブスクール（もう一つの学校）がある。オルタナティブスクールとは一般的な学校のような公教育とは異なる独自の教育方針で運営する学校であり、子どもの主体性を育み、自由に学ぶことができることが特徴である。オルタナティブスクールのように、**多様化する社会の中で学校もまた多様化するべきである**と考える。

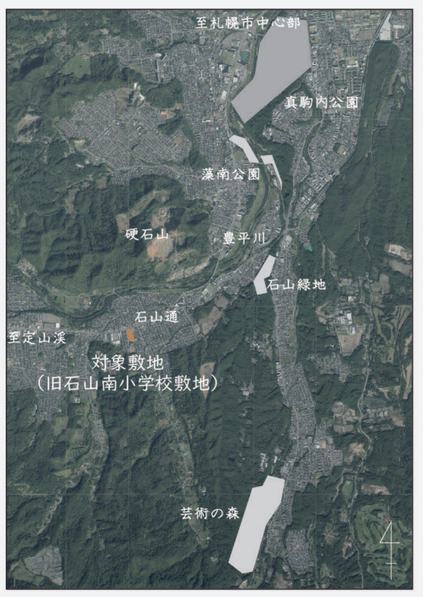
これからの学びの場

不登校をはじめとする子供たちの今と社会の動きを踏まえ、以下の４つの項目がこれからの学びの場に必要とされる要素であると考える。

・画一化された教育ではなく、**社会の変化と共に緩やかに変容していく**教育
・**能動的な学び**であること
・**色々な経験**ができること、**多様な価値観**を知ること
・集団としてだけではなく、一人の人間としての**主体性を育む**こと

子どもの頃の記憶や経験は今後の人生に大きな影響を与える。子どもにとって非常に長い時間を過ごす学校には子どもに必要な記憶や経験の可能性を掴むきっかけが十分にあるだろうか。逆に、大人になった私たちは同じようなきっかけを過小評価していないだろうか。

03 札幌市南区石山地区の今と、学びの場の地域的な位置づけを考える



札幌軟石の歴史的背景とその名残り

左図は石山地区とその周辺の地図である。石山緑地の西側が石山地区の中心部で、ぼすとかんをはじめとする小規模な商業施設が点在しており、そこが石山地区の魅力となっている。ぼすとかんは札幌軟石の歴史を伝承するために旧石山郵便局を再生した施設であり、北海道遺産にも登録されている。

学びの場の地域的な位置づけ

石山地区における札幌軟石とアートに対する熱量は大きく、少子高齢化の中でも若いアーティストや地域を巻き込んだイベントが多く開催されている。そういった文化の発信拠点（**アウトプット**）は多くあるが、それに対して**インプット**できる場が必要だと考える。単純な学びの場ではなく、子どもとアーティスト、子どもと住民、アーティストと住民、、、**色々な関係性の中で生まれるエネルギーやアイデア**を石山地区全体に広げられる学びの場が必要なのではないだろうか。学びの場の対象敷地は周囲が住宅街に囲まれた場所で、北側は石山通に面した旧石山南小学校の敷地である。歴史ある大きな通りに面し、かつ自然が近い敷地である。自然から都市へ、豊平川の流れに沿って石山の歴史や文化を伝承させていく。

札幌軟石の採石場跡地

ぼすとかん外観

04 気づきの立方体モデルを構築し、学びの場を形作る

「気づき」がこれからの学びの場のヒントとなる

不登校の背景とこれからの学びの場の在り方を踏まえ、「気づき」が１つのヒントになると考えた。不登校の子供の無気力や不安な状態は「気づき」というきっかけから払拭されるのではないだろうか。

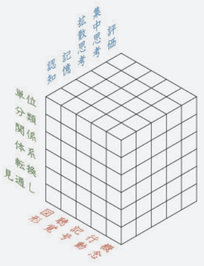
・気づくと自分の視野が広がる
・気づき、理解を深められると自分の視点が増える
・気づき、理解し、多くの視点でモノゴトを見ると、本質にたどり着く

→　より多くの気づきを得る人はより豊かな感性を持つ

気づきの構成要素

気づきは自分の感覚・感情・価値観の変化や事象と記憶のギャップなど、様々な場面で生まれるものだが、この要素を明確に表現することができればより多くの気づきを得ることができるのではないだろうか。気づきは**感覚**（五感）、**人との関わり**、**場所**の３つの要素からなると考える。

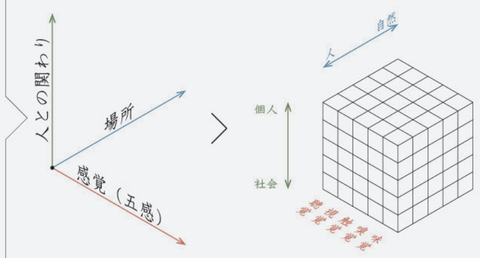
気づきを立方体モデルによって可視化する



ギルフォードの「知能構造モデル」

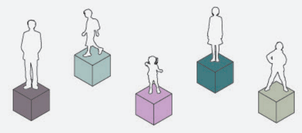
ギルフォード博士は人間の知能を構成している要素（知能因子）を分析し、それらの構造的な全体の仕組み（モデル）を考え出した。知能の**領域**、**所産**、**はたらき**の組み合わせにより、**合計１５０の因子**で知能が構成されるとしている。

基となる気づきの３軸　　学びの場スケールに転換し、モデルを構築

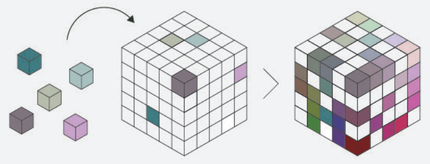


知能構造モデルを参考に、気づきを立方体モデルとして構築する

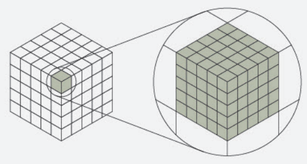
気づきの立方体モデルをベースとした、子どもとアーティストの学びの場



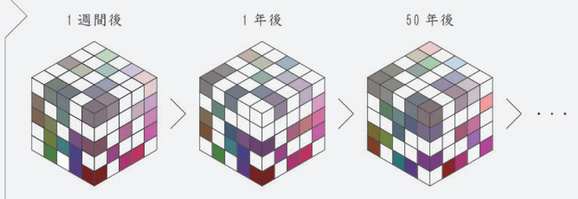
人にはそれぞれの色がある。それは他者の気づきの因子として立方体モデルの中をめぐる。今は薄く見えない因子でも、新たな気づきを得ることで自分の色（**感性**）が表出していく。



アトリエや子供の居場所が集積し、学びの場を形作っていく



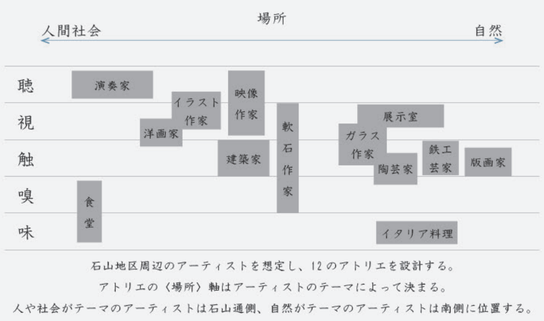
学びの場のフレームの中にもまた、一人一人の立方体モデルがある



時の流れとともに姿を変える学びの場のイメージ

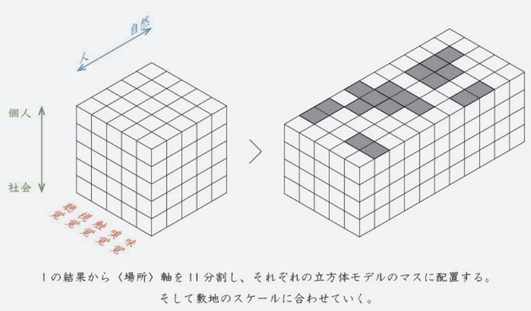
05 設計手法

1 アーティストの感覚・場所平面の位置を設定する



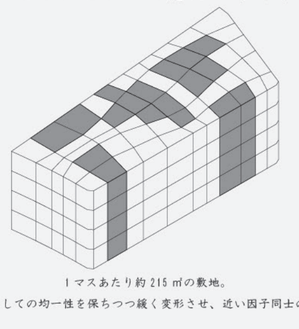
石山地区周辺のアーティストを想定し、12のアトリエを設計する。
アトリエの〈場所〉軸はアーティストのテーマによって決まる。
人や社会がテーマのアーティストは石山通側、自然がテーマのアーティストは南側に位置する。

2 立方体モデルを敷地のスケールに合わせる



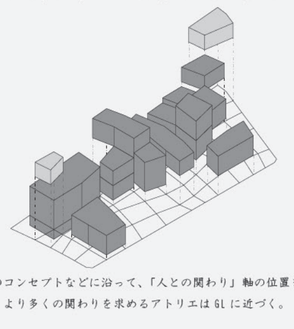
１の結果から〈場所〉軸を11分割し、それぞれの立方体モデルのマスに配置する。
そして敷地のスケールに合わせていく。

3 必要な空間の大きさに合わせて感覚・場所平面を歪ませる



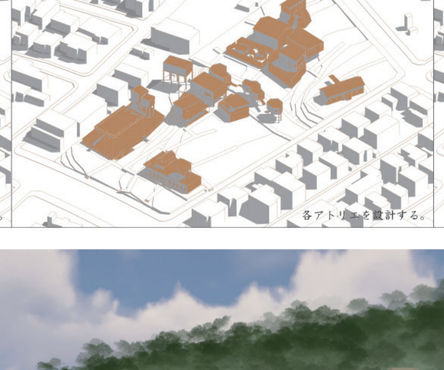
１マスあたり約 215 ㎡の敷地。
マスを立方体モデルとしての均一性を保ちつつ緩く変形させ、近い因子同士の関係を意識させる。

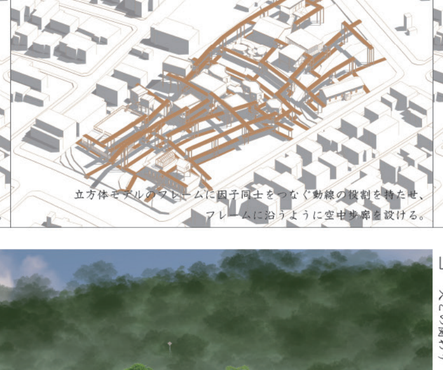
4 アトリエに高さ方向の要素を追加する

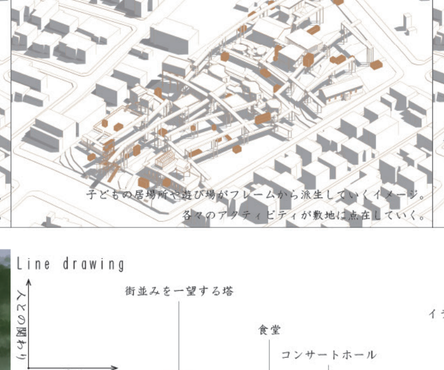


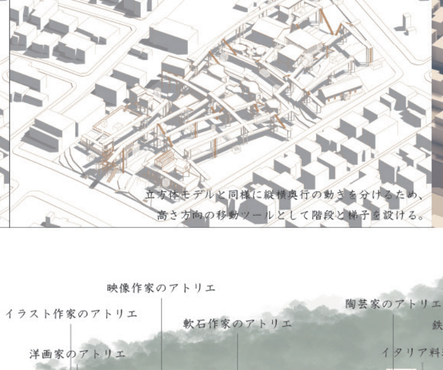
アトリエのコンセプトなどに沿って、「人との関わり」軸の位置を変える。
より多くの関わりを求めるアトリエは GL に近づく。

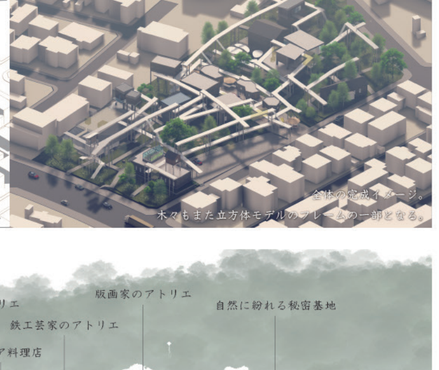
5
実際の敷地形状にアトリエの因子を配置する。

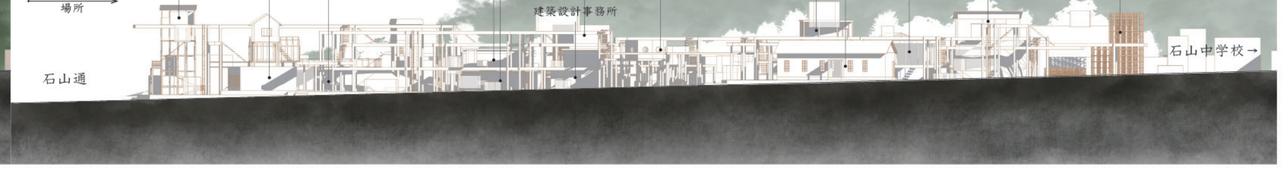

6
各アトリエを設計する。


7
立方体モデルのフレームに因子同士をつなぐ動線の役割を持たせ、
フレームに沿うように空中歩廊設ける。


8
子どもの居場所や遊び場がフレームから派生していくイメージ。
多くのアクティビティが敷地に点在していく。


9
立方体モデルと同様に縦横奥行の動きを分けるため、
高さ方向の移動ツールとして階段と梯子を設ける。


10
各敷地の成果イメージ。
木のもまた立方体モデルのフレームの一部となる。

Rendering

Line drawing